

一次介入で治まらない場合、二次介入を産婦人科医、助産婦の協力の下、産婦人科医院で小児科医が行った。

3) 試行期間：平成10年8月～13年1月

2. 研究結果

妊婦420名中一次介入のみ13例、二次介入4例だった。

1) 一次介入のみの事例

事例1：24歳 第2子

第一子は低出生体重児（出生体重2,190g。1ヶ月入院）だった。早産不安、育児不安あり。無事出産。正常児。母子介入で育児不安ほとんどなくなる。

事例2：32歳 初産

夫再婚。低出生体重児（出生体重2,340g）。育児不安あり。母子介入で育児不安ほとんどなくなる。

事例3：39歳 第2子

うつ病あり、精神科で治療中。無事出産。母子介入して大分笑顔での働きかけが多くなった。

事例4：29歳 第2子

母再婚。子供は前夫の元に。別れた子供に対して罪悪感がある。母子介入で無事出産し子育てを楽しんでいる。

事例5：20歳 初産

父18歳。父は「子供の時のことは忘れた。子供時代のことは話したくなく、写真もない」と言う。中学時代不登校も有った。無事出産。親子介入で、父の話し掛けは少ないがよく赤ちゃんの世話をしている。

事例6：17歳 初産

父20歳。無事出産。育児不安有り。親子介入で、両方の両親の十分な協力あり、父母共楽しんで育てている。

事例7：27歳 初産

父30歳。育児不安有り、助産婦につまらないことを色々尋ねる。父は一緒に来るが入室を勧めても診察室に入って来ない。親子介入をした。父母共エコー内胎児を見て喜ぶ。育児不安大分軽くなる。母は助産婦に甘える。

事例8：26歳 初産

父31歳。つわりがひどく、父にべったり甘えている。親子介入をした。父母共エコー内胎児を見て喜ぶ。つわり、甘えは続いていた。無事出産時々混乱を起こしながら父親に助けられて育てている。

事例9：30歳 第3子

父32歳。父は色々協力してくれるが、二人の子どもの相手をあまりしてくれない。父は子ども

時代病弱で入退院をくり返していた父親（慢性の肝障害）に遊んでもらった記憶がほとんどない。出産後怖がる父に赤ちゃんを抱っこさす等して大分受け入れるようになった。

事例10：28歳 第5子

父25歳。母は2人子どもを連れての再婚。現在子ども4人。第一子自閉的傾向あり。母は乳児期に母親と離別。父親も相手になってくれなく祖父母に育てられ、辛いことが多かった。経済的にも余裕がない。やさしい父に支えられて、無事出産。時々混乱をおこしながら育児をしている。

事例11：28歳 初産

父26歳。子ども時代母の父親は厳しかった。父の母親は恐かった。父母とも協力し、無事出産、楽しみながら子育てしている。

事例12：36歳 第3子

父41歳。父母はいとこ同士で、血族結婚だから、子どもに影響しないか心配。母は2人の子どもを連れての再婚。2人の子どもが時々うるさくなる。父と子どものこと、赤ちゃんのことをあまり話し合わない。父方の母親が口煩くて、色々気を使っている。子ども時代母は父親が恐かった。父は母親が恐かった。父の姉と助産婦の温かい支援で無事出産、育児を楽しんでいる。

事例13：母15歳 父15歳 初産

父母とも中学校3年生。共に母子家庭で育つ。宗教の関係で中絶を拒否。保健婦が、家庭訪問をしながら母、母方祖母に介入していた。9ヶ月、低出生体重児で出生。現在父母共母乳を持参して病院に通っており、カンガルーケア等しているが、赤ちゃんの受け入れが不十分である。二次介入を予定している。

2) 二次介入症例

事例1：35歳 第3子

父34歳。5ヶ月で妊娠中絶手術を希望。胎児が大きくなっているため手術不可能だと説明。流産の危険性あるので入院を勧めたが拒否。調査票より父親に不倫の子供と思われ、父母間の不和が判明、一時介入で解決できず、二次介入となった。母の気苦労をねぎらい、赤ちゃんが一日一日大きくなっていること、兄弟も出生を楽しみにしており、お母さんは独りで無いことを話し合った。その後母は入院し治療、以後順調に経過し無事出産。母は赤ちゃんを可愛がるが父は全く相手をしない。離婚を考えている。

事例2：27歳 初産 保育士 流産の夢をみる 子育て不安

父30歳。2ヶ月目初診。妊娠とわかり非常に喜

んだ。つわりが始まった2カ月末より、妊娠経過は順調で、全く心配ないと説明受けるが、頻回に流産の夢を見る。父は「夢なんか気にするな」と子供に関心を示さない。出産、出生後の子育てに自信なくなる。調査票より父母共子供時代の問題点が浮かび上がり、一次介入で解決できないため、6カ月目二次介入となった。

母：「自分は一人っ子。父親はアルコール依存症でよく母親に暴力を振るった。度々父親を殺してやりたいと思った。母が胎児期、母親妊娠8カ月の時、父親が母親のお腹を蹴った。直後破水し、母は出生体重2,600gの早産児で生まれた。母親はいつも「早産児で、障害児になるのではないかとすごく心配した」と母に話した。母は今でも父親を許せない。」「夫は6歳時母親と離別し、妹と共に父親と祖父母に育てられた。母親に対して恨みを持っている。"夫は子供を虐待するのではないか"と心配になる。」

母と"母の出生時の状態と流産の夢とが似ていること"を話し合い、"父には新聞の折り込み広告で筒を作り、胎児心音を聞かす、胎動を見せ、お腹に触れさすように働きかけること"を話し合った。

その夜母は父と夢の原因について、自分の出生時のこと、お互いの子ども時代のことを話しあった。翌日母は母親に夢の原因について話した。母親は涙を流して聞いてくれた。3日目より流産の夢はなくなった。父は「心音が聞こえる」と喜び、毎日のように楽しみながら胎児心音を聞き、母のお腹に触って、胎動を喜ぶようになった。母の出産不安、子育て不安も徐々に無くなった。

父の立ち会いで元気な男児出産。父は非常に感動した。現在10カ月。父母共楽しみながら育児をしている。

母は自分の出生時、母親が心配したことの話を聞き、母親の心配が胎児に投影し、流産の悪夢となっており、父は幻想的乳児像の混乱をおこしていた。

事例3： 24歳 2回目妊娠 子供はどうなってもいい

妊娠5カ月。母に貧血、切迫早産、胎児発育不全有り、治療を勧めるが受け入れない。父の来院を頼んでも来ない。治療をいくら勧めても「子供はどうなってもいい」と言ってまともに治療をしようとしない。

調査票より父の子供時代に問題があることが分かってきた。一次介入の結果ようやく父が来院、助産婦が話を聞くと、父は子供時代に虐待を受けており、生まれた子供を虐待するのではないかと心

配して、父が出産を拒否していることが分かった。「今、家内の連れ子を育てるのに精一杯だからもう子供はいらない」。産婦人科医、助産婦の温かい支えでようやく治療を承諾、2週間入院した。以後順調に経過し無事女児を出産。父母ともすごく喜んだ。健診と育児相談と言うことで二次介入となった。

生後3週間の健診で全く心配なく、上手な子育てをしていることを伝え、安心させた。母は6歳男児を連れて父と再婚。父は義息子に対して「絶対怒らないように気を付けている」と言う。

2週間後再診。父母から詳しく話を聞いた。父：「父親はアルコール依存症で2歳頃母親と離婚した。6歳父親再婚。義母より食べさせない、怒鳴る、つねる等された。物差、布団叩き、洗濯箒で頭を叩かれ血を流したこともある。勉強が分からないと鉛筆で手背を刺された。先生に厳しい躰を注意された後、手背を刺すのは止めたが、背中、腰等洋服で隠れたところを攻撃された。恐くて先生に義母の虐待に付いて話すことができなかった。父親も助けてくれなかった。よく外に隠れ、一人で遊んだ。人は絶対信用できないと思った。

中学校時代、家出、窃盗、校内暴力、喧嘩をよくした。喧嘩しだすと頭の中がからになって叩き、大怪我させたこともある。父親、義母共に無視され、先生にはよく怒られた。中学卒業、家を出て色々な仕事をした。ライオン等野生の動物に見習って、誰にも頼らず、一人で頑張って生きてきた。

24歳、家内に出会って、虐待を受けて辛かったことを話した。家内は涙を流して聞いてくれた。"自分のような人間の話に対して涙を流してくれる人がいる"ということを知って驚いた。

妊娠と聞いてすごく嬉しかった。でも可愛い子供でも、子どもがいたずらした時怒りだすと、頭の中が空になって虐待するのではないかと、すごく恐くなった。長男だけで精一杯なのに、これ以上子供を持ってはいけないと思うようになった。でも今ではこの子が生まれてよかったと思う。元気に泣く姿を見ると楽しくなる。」

母：「妊娠して本当は嬉しかった。でも主人が"子供はいらん"と強く言うからもうどうでもよくなっていた。けど元気に生まれて、主人も喜んでくれてよかった。」

医師：「自分の過去の辛い事を話す事が出来、虐待の危険性がある事を自覚できればもう大丈夫。すばらしい奥さんに巡り会い、可愛い子供二人も恵まれて幸せ者。」

助産婦：「心配事があればいつでも電話すればいい

い。夜中でも連れて来ればいい。]

父：「全く他人の先生や看護婦さんが僕のようなつまらない人間の話を聞いてくれる等考えたことが無かった。」と涙を流して喜んだ。

その後時々助産婦に電話がかかっていた。

7ヵ月、父母兄共に来院。兄は運動、情緒共に順調に発育し、父母共に明るく楽しみながら子育てをしていた。父も「この子が生まれていてよかった」と言う。兄も父に自然体で甘えていた。

10ヵ月、父が努めていた土建業が倒産。サラ金業者から借りていた金が返せなくなり、母も子どもを預けて夜間働きだす。

13ヵ月、父は大阪に出稼ぎに行き、母は託児所に子どもを預け、地元で夜間働いている。

17ヵ月、父はよく電話をかけてくる。兄は明るく育っている。

父は幻想的乳児像が混乱していたが、内省的自己の養成で赤ちゃんを受け入れられるようになった。

事例4 母19歳 父16歳 初産

父母共若年であり、調査票より父母共学童期に両親に満たされていなかった。母は子ども時代父母からスパルタ教育を受けた。高校時代父に反抗し、夜徘徊し、喫煙等していた。父は父母の不和の中で育ち、小学校4年生の時、母が首吊り自殺をしているのを見つけた。悲しく、寂しく、母親に対してひどく腹が立った。その時の気持ちは誰にも言っていない。父親は受け入れてくれなかった。妊娠後結婚し、二人共あまり赤ちゃんに関心を示さない。

8ヵ月目、二次介入となった。母が子ども時代辛かったこと、父が母親の自殺で混乱おこし、辛かったこと等話し合った。1週、1ヵ月、3ヵ月、6ヵ月の赤ちゃんの健診風景を父母に見せた。赤ちゃんが、子宮内に居た時の丸くなる姿勢、羊水の温もりなど子宮内で気分よかったことはなんでも覚えていること、生後も色々のことをどんどん覚えていることを見せた。非常に驚き「この子も何でも覚えているんだ」と、不思議そうにお腹を眺め、摩っていた。その後だんだんと胎児に関心を持つようになった。保健婦にも連絡し、家庭訪問もした。

10ヵ月、陣痛で入院。小児科医と保健婦が産婦人科医院を訪問、父母共喜んだ。無事男児出産。分娩時父は立ち会いをし、感激で涙を流した。次の日小児科医が訪問、健診で異常ないことを伝え、赤ちゃんの色々の反応を見せると感激し喜んだ。2日目保健婦が訪問、非常に喜んだ。

退院後1週間、保健婦が家庭訪問し、母親が少し

疲れていることをキャッチした。助産婦が電話すると、夫婦喧嘩をしたという。

生後3週間、赤ちゃん健診で病院受診。上手に育てていることを伝えると喜んだ。母が赤ちゃんの世話をすると父のやきもちが出てくる。母は赤ちゃんの世話と、父への対応で混乱をおこすことがあると言う。

助産婦の電話訪問、保健婦の家庭訪問、頻繁な病院受診で援助を続ける予定。

父母共幻想的乳児像の混乱が合った。又父が母に母親転移をおこし、赤ちゃんがえりをして、混乱をおこしている。

3. 考察及び今後の課題

大多数の助産婦は、非常に熱心で、豊かな包容力を持ち、父母の心の混乱に対してすばらしい治療的対応をしている。しかし日常行っている親対応に自信を持っていない。乳幼児精神保健専門家がスーパーバイザーとなれば、間主観的アプローチができるようになり、自信持って治療的介入ができ、親をholdingし、親に十分な内省的自己を作らせ、子育て混乱を治めてくれる。

妊娠中父母は、無意識の内に自分の赤ちゃん性が誘発され¹⁰⁾、子ども時代の心の傷が浮かび上がる。その上妊婦は女性として一番恥ずかしい生殖器を全てさらけだし、母子の命を産科医、助産婦に全て預ける。そこでholdingし間主観的アプローチ¹¹⁾をすれば、ドーラ効果¹²⁾がおこり、父母は、信頼した医師、助産婦、乳幼児精神保健専門家に心を開き、何でも話すようになり、十分な内省的自己を持つようになり、心の傷も癒されると思われる。調査票で子育て混乱の背景をさぐり、一次介入を産科医、助産婦が行い二次介入を乳幼児精神保健専門家が行えば、子育て混乱、虐待はずいぶん予防できると思う。

また高リスク妊婦に対し、保健婦が産科医院と連絡とりながら、家庭訪問し、出産後も家庭訪問を続けることが非常に有効だと思われる。

調査票を使用してのリスク妊婦の発見、治療的介入は非常に効果があるが、下記のような問題点もある。

1) 調査票はリスク妊婦発見の手助けとして使用されるべきで、使用する産婦人科医、助産婦、看護婦は乳幼児精神保健の知識を十分に身に付け、自分の見たい目を一番大切にし、調査票の結果に操られることなく、上手に利用すべきである。

2) リスク事例への対応は、その事例に合ったそれぞれ異なった介入をすべきで、集団での対応

では本格的育児混乱の解決にはならない。

3)産婦人科医、助産婦に対する乳幼児精神保健の教育方法を早急に考える必要がある。

4)早急に乳幼児精神保健の専門家を多数養成する必要がある。

なお同様の取組みは大病院の周産期センター産婦人科でも試みているが、今だ軌道にのっていない。多数の産婦人科医、助産婦、看護婦が交代で妊婦に接するため、妊婦との信頼関係ができていく。リスク妊産婦に対して、産婦人科医、助産婦、看護婦、小児科医、精神科医の全員が乳幼児精神保健の知識を持ち、統一して妊産婦に接してゆくことが難しい。このような難題をどのように克服すればよいか、今後検討してゆく予定である。

■ 保育園における関係性障害治療と育児混乱、虐待への早期介入

ほとんどの園児は毎日多かれ少なかれストレスを受け、心に傷を受けている。心の傷が癒されないと、幼児はその混乱を心身症、異常行動として表現する(4)。子どもは家族の中で育っている。心の傷が癒されるのも主に家庭であり、保育園である。これらの症状は関係性障害(11)である。早期にこれらの症状、問題の親子関係を見つけ、早期に介入すれば、関係性障害は癒され、子育て混乱、虐待も早期に治められ、後の精神的混乱も予防できる。

1. 研究方法

1)高知市内の保育園で行った。

2)子育て環境調査票「幼児用1」(図3)、「幼児用2」(図4)を使用し、幼児の心の傷をチェックした。

3)子育て環境調査票「幼児用3」(図5)を使用し保育士からみた親子関係と、父母の抱えるトラブルをチェックした。

保育士が見て気になる子どもに対し、乳幼児精神保健の専門家の指導の下、以上の3種類の調査票を使用し、異常があれば、まず保育士が一次介入し、難しい場合、二次介入として児童相談所より乳幼児精神保健専門家が園まで出向いて、事例検討を通じて介入方法を検討し、保育士が親子介入をした。二次介入で解決できない事例は児童相談所で専門家が三次介入をした。

児の心の傷に対しては、保育士が園で甘え療法(アタッチメント療法)⁴⁾を行い、家庭でも甘え療法が行えるように介入していった。

4)試行期間：平成10年10月～13年1月

2. 研究結果

園児242名中一次介入のみ18例、二次介入8例、三次介入1例だった。

1)一次介入事例

事例1 4歳 女兒

父離別。育児放棄。母の愛人が毎夜自宅に来る。子供は別れた父の家、母方祖父母の家等に泊まりに行く。児は「今日はどこに泊まるんじやろう。ママの家、パパの家、おばあちゃんとか」とか言う。時々朝食を取らないで通園する。保育士が児の甘えを受け入れ、父に働きかけ、父が引き取り、父方祖父母に助けられ、育てている。

事例2 2歳11ヶ月 女兒

言語発達遅延有り。母は早口で子供に合わせた話をしない。いつも着飾っている。子供を眺めて、一緒に遊ばない。母は子供時代父親母親に甘えた経験がほとんどない。保育士が母子を誉め、児への接し方を見せて説明した。母は抱っこ、児に合わせた話し掛けが大分できた。

事例3 4歳 女兒

双生児第2子(第1子男児)、兄姉同胞4人。父は子供を可愛がるが立腹すると物に当たる。家では双生児の片方の男児が強く、母を取り上げ、母に甘える機会が少ない。指しゃぶりあり。母に積極的な児の相手を勧めた。児は母によく甘えるようになった。指しゃぶりは続いている。

事例4 5歳 男児

一人っ子。抗けいれん剤服用中。友達のものを取る。母看護婦で夜勤あり、「最近この子が可愛くなくなった」と言う。家でテレビばかり観ている。母の苦労をねぎらう。児は母に甘えるようになり、友達のもの取ることもなくなった。

事例5 2歳5ヶ月 男児

指しゃぶりがひどい。祖母は未婚の母親で母の姉と母と母の妹の3人を育てる。母の姉も未婚で4人の子供を育てている。母の妹も未婚で子供一人育てている。母は児を出産後すぐ離婚。母を誉め、児は母に甘えるようになった。

事例6 5歳 女兒

友達と遊べない。指しゃぶりあり、保育士に異常にくっついてくる。父は転々と職を換え落ち着かない。母夜間の仕事。母の苦労をねぎらう。母は児の甘えを大分受け入れられるようになる。

事例7 6歳 女兒

児が異常に保育士にくっ付きまわる。父が精神病院に入院。父方祖父母から「母が原因で入院になった」と責められている。母の苦労をねぎらう。児は母に甘えている。

事例8 4歳 男児

塾に通わせている。母進学高校受験失敗。母の姉は進学高校卒業。指しゃぶりあり。児の母に対する甘えは大部分多くなったが塾通いは続いている。

事例9 4歳 女児

母子家庭。母激しい性格。子供の先に立って歩く。児は保育士にくっつきまわる。母をねぎらい、母に児が保育士に甘えるところを見せ、児を誉め、甘えの受け入れをすすめているが、母の受け入れが不十分。母は子ども時代あまり甘えていなかった。

事例10 4歳 女児

母はいつも着飾っている。保育士に「この子は先生がいなくて何も出来ない」と言う。保育士に異常に甘える。母に児の保育士への甘えを見せ、児を誉め、甘えの受け入れを勧めている。児も母に大分甘えるようになった。

事例11 3歳 男児

事例10の弟。何でも手づかみで食べるていたが、箸で食べるようになった。母は甘えの受け入れを大分できるようになった。

事例12 2歳 男児

児が乱暴なことをする。母は受け入れたり、突き放したり一貫性がない。母の労をねぎらい、子供を誉め、甘えの受け入れも大分できるようになった。

事例13 4歳 女児

事例12の姉。保育士にべったりくっついたり、反抗したりする。母の労をねぎらい、児を誉め、甘えの受け入れが大分できた。

事例14 5歳 男児

事例12の兄。保育士に友達のことを色々申し上げる。会話時視線が合わない。母の苦労をねぎらい、児を誉め、大分甘えるようになっている。

事例15 5歳 女児

落ち着きがない、友達と遊べない、時々朝食をとらずに来園する等あり。母が児を十分に受け入れできていない。保育士が母に話し掛けをし、大分児の甘えを受け入れられるようになった。

事例16 4歳 男児

友達に噛み付く、つばを吐きかける、保育士に異常に甘える等あり。父遠隔地勤務で年に2~3回帰ってくる。父と母方祖父母との不和がある。母は子育てを楽しんでいないように見える。保育士が母へ話し掛け、児の行動も少し落ち着いている。

事例17 6歳 女児

他児にいじわるをする、おもちゃを乱暴に扱う、保育士に異常に甘える、時々朝食を取らないで来園する。父母の不和がある。保育士が母に話し掛け

母も大分明るくなった。児のいじわる、乱暴も少し落ち着いている。

事例18 3歳 女児

いじわる、激しい啼泣、保育士に異常にくっついてくる等あり。母方祖父母との不和あり、母は子育てを楽しんでいないようにみえる。保育士が母に話し掛け、母も家庭内のことを大分話すようになった。児も大分落ち着いてきた。

2) 二次介入事例

事例1 5歳 女児

友達と遊べない。保育士に異常に甘える、尿失禁、言葉の遅れ、ハンカチを持ち回る等あり。時々朝食をとらないで園に来る。母は転居してきたため話し相手がない。父がスパルタ教育をし、母も父に同調していた。連絡あり児相スタッフが園に出向いて介入方法を話し合った。保育士が母に話し掛け、児の甘えの受容をすすめ、児は大分落ち着いている。児に対する甘え療法と母に対する保育士の holding で落ち着いた。

事例2 3歳 男児

事例1の弟。友達と遊べない、保育士に異常にくっついてくる、言葉の遅れ、話す時目が合わない等あり。母に児の甘えの受容をすすめ、児は大分落ち着いている。

事例3 5歳 男児

まばたきをひどくする、頻尿・尿失禁、おねしよう、指しゃぶり、抱っこした時身体が固い等あり。父は職場が忙しく、夜遅く帰ってくる。専業主婦の母は一生懸命育てているが、児の受け入れ方法が分からないように見える。児相に連絡あり、児相スタッフが園に出向いて介入方法を検討した。保育士が専業主婦の孤独さをねぎらい、甘えの受容をすすめた。母は保育士によく話すようになり、大分甘えも受容できるようになった。児は保育士にも甘えるようになり、症状も大分軽くなっている。母には holding 児には甘え療法で落ち着いた。

事例4 5歳 男児

2歳8ヶ月より通園。3歳児検診で言葉の遅れを指摘され母はショックを受けた。4歳より言語訓練に通っている(1~2回/月)。他に尿失禁、友達と遊べない等あり。母は児の保育に自信を無くしていることが分かった。連絡あり児相スタッフが園に出向き、介入方法を話し合った。

保育士は母をねぎらった。母は保育士に勇気づけられ、言語訓練の様子、家庭内のこと、世間話等保育士に色々話すようになった。父・母・児・妹の4人家族。父は児の側で自分勝手に幼稚な遊び(お

もちゃ等で)をする。児は乳児期から独り遊びをして、手が掛からなく、良い子だった。父母とも児に話し掛けることがあまりなかった。1歳頃、児の話が母には全く理解出来なかった。母はだんだんと児を抱っこすることも多くなった。児は最近言語訓練に行く時、母と車に乗るのを非常に喜び、保育士に甘えることも多くなった。言語も随分発達し、尿失禁も無くなっている。

父母は児に対して間主観的アプローチができていなかった。保育士の母に対する holding と児に対する甘え療法で落ち着いてきた。

事例 5 4歳 女児 引っ掻き傷、皮下出血、尿失禁

保育士が児の顔に不自然な引っ掻き傷、皮下出血があることに気付く。調査票で保育士の顔を見て異常に甘える、悪戯がひどい、排尿を我慢し時々漏らす、指しゃぶり、ひとり遊び、チック等心の傷を疑う症状あり。家族関係では父49歳、母27歳、児は父の連れ子、2歳の妹がいる。朝夕の送り迎えの様子より母の受け入れが不十分なことが分かった。児に聞くと「母にお腹をキックされる」という。虐待を疑い、児相に連絡がありスタッフが園に向いて介入方法を話し合った。保育士が積極的に母と雑談する、母の労をねぎらう、児を誉める等した。母は保育士に家庭内のこと等色々話すようになる。3ヶ月後受け入れは不十分だが、虐待を疑わず身体的外傷は無くなっており、児の心身症状も軽くなっている。母への holding と児への甘え療法で落ち着いている。

事例 6 4歳 男児 時々パニックになる、便失禁

3歳時より時々パニックになり、毎日のように便失禁がある。調査票で父母とも明るく子育てを楽しんでおり、特に問題は無い。しかし送り迎えをする母親は、無理して明るい態度をとっているように見えた。子ども側の調査票では独り遊びが多い、保育士に異常にくっついてくる。便失禁、時に尿失禁、ハンカチを持ち回る、抱っこした時身体が固い、時々話し掛けても反応が無い、部屋の隅っこを好む、水を怖がる等関係性障害の症状あり。あまり改善されず児相スタッフが保育園に出向き、介入方法を検討した。

保育士が、児に対しては甘え療法を行い、母に対しては朝夕の送り迎えを利用して、介入していった。児は保育士に抱っこ、おんぶ等激しく甘えるようになった。母も色々なことを話すようになった。母の話より母は子ども時代虐待を受け、辛い思いをしたため、子どもには辛い思いをさせないよう

に、努めて明るく育てていること、しかし子どもがくっついてくるとうるさくなり、突き放すことがあり、思うような行動をとらない時、腹が立って怒鳴りつけ、叩くことがあることを話だし、保育士が受け入れていった。

徐々に母親の異常な明るさは無くなり、大分児を受け入れられるようになっていく。子どもの種々の症状も軽くなっている。母は最初間主観的アプローチができなかったと思われるが、保育士の介入で内省的自己が養成され、間主観的関わりができるようになった。

事例 7 4歳 男児 引っ掻き傷、皮下出血 母子家庭。指しゃぶり、表情が暗い、元気がない、

友達と遊べない、あちこちに皮下出血、引っ掻き傷あり、保育士に激しくくっついてくる、時々朝食を取らずに来園する。送り迎え時母は子どもに冷たく、児も母にあまり甘えない。保育士が母にそれとなく児の甘えの受容をすすめたが上記症状は続いた。母に愛人がいてよく母のところに来ていたことがわかった。愛人が児を虐待し、母も加勢しており、母の知人から愛人と別れるように忠告され、母は益々拒否的になっていることが分かった。連絡あり児相スタッフが保育園に出向き、母子介入方法を検討した。保育士が児に対しては甘え療法を行い、母に対しては、母子の良い点を誉め、母の苦労をねぎらった。愛人の件は全く触れないようにした。母は保育士にだんだんと経済的なこと、子ども時代両親の不和で辛い思いをしたこと、愛人のことで悩んでいることなど話した。半年後身体的外傷は全く無くなり、母も児の甘えを受け入れられるようになり、児も明るくなった。1年後母は愛人と別れ、児への虐待は無くなり、児も元気に友達と遊べだした。母に対する保育士の holding と内省的自己養成で母は子どもを受け入れられるようになった。甘え療法で児の心的外傷は癒されてきたと思われる。

3) 三次介入事例

事例 1 5歳 女児 指しゃぶり、落ち着きがない

児は指しゃぶり、落ち着きがない、保育士に異常にくっついてくる等あり。送り迎えの母を見ると突き放すような態度がある。母は保育士に「この子はうるさい」と言う。保育士が母に話し掛けるが、母は保育士のペースにのってこない。保育士と児相職員が電話で介入方法を話し合ったが母に変化が見られない。児に対しては園で保育士が甘え療法を行った。保育士の勧めで母は児童相談所に来所した。母、父、児との3人家族。

母：「この子はすごく可愛い、甘えてくるとうさくなり、いらいらする。特に父が仕事で夜遅くなったり、姑に小言を言われたりし、気分が悪くなると、児がすぐうさくなる。児がわがまま言ったり、反抗したり、泣いたりすると益々腹が立ち、『うるさい！ 出て行け！ ぶっ殺すぞ！ 死ぬ！』等激しい暴言になる。時には叩く、蹴る、髪をつかむ等激しい暴力になる。自分で"これではいけない"と思っても止めることができない。父は児を可愛がり、児も父に甘える。父子が仲良く、楽しそうに遊んでいるのを見ると、すごく腹が立つ。」

「母の子ども時代、父親に精神疾患があり、興奮すると大声を出し、母親を叩く、蹴るなど暴力あり、夜中に外に飛び出すこともあった。自分は首を絞められたこともあり、すごく恐かった。母親はいつも忙しそうに仕事をしており、母親からよく怒られ、叩かれたこともある。同居していた叔父が、アルコール依存症で、酔狂時怒鳴る、叩く、物を投げる等し、特に母に対して激しかった。恐くていつも布団をかぶって避難していた。今でも叔父に殺されそうになる夢を見るのが時々ある。」

母の子育て混乱の原因が、子ども時代の被虐待にあることを説明し、子ども時代の心的外傷を思い出させ、言語化させた。母が気分悪い時は甘えてきても無理して受け入れなくてもいいこと、できるだけ父に児の甘えを受け入れてもらうようにしている。3ヵ月後、大分児に対する暴言、暴力は少なくなっている。児は保育士に甘えて、大分落ち着いてきた。母は定期的に児相へ通所している。

holdingにより、母の内省的自己が大分養成され、大分落ち着いている。

3. 考案及び今後の課題

大多数の保育士は、非常に熱心で、豊かな包容力を持ち、親子の心の混乱に対してすばらしい治療的対応をしている。しかし日常行っている保育方法、親対応に自信を持っていない。乳幼児精神保健専門家がスーパーバイザーとなれば、間主観的アプローチができるようになり、自信持って治療的介入ができ、親子をholdingし、子どもの心の傷を癒し、親には十分な内省的自己を作らせ、子育て混乱や軽度の虐待はほとんど治めてくれる。

調査票を使用し、父母の子育て混乱、親子関係の歪み、子供の心の傷をピックアップし、早期に介入すれば、虐待等子育て混乱も予防でき、児の心の傷も癒され、安定した愛着関係ができ、心の安全基地もでき、思春期以後の精神的混乱も予防できる。また乳幼児の心の傷は早期に発見し、早期に甘え療

法を行えば癒される。

甘え療法に関しては、第101回日本小児科学会学術集会で「アタッチメント療法（甘え療法）」として認められ、第7回世界乳幼児精神保健学会（モントリオール）には「Amae Therapy」と言う演題で発表した。抱っこ、おんぶ、添い寝、一緒に入浴等日本古来の伝統的甘えによる間主観的かわり、養育者と子どもが温かい心の触れ合いをすれば、心の傷は癒される。甘えは日本民族全員に世代間伝達されており、甘え療法は誰にでもできる。しかし甘え療法を試みても、間主観的かわりができない場合、お互いの心は満たされなく、治療効果はほとんどない。癒されていない心的外傷を持っている養育者、治療者は、甘えにより心的外傷による混乱が浮かび上がり、子どもを拒否し、虐待をする危険性がある。甘え療法を行う養育者、治療者は、自分の心の中をよく知り、心の整理をきちっとしておく必要がある。

子どもは家族の中で育つ。心に傷をつけるのも、心の傷を癒すのも、第一は家族である。子どもの心身症、異常行動は父母との関係性障害⁸⁾とも言える。関係性障害を予防し、癒すためには、事例検討により子どもを中心にした家族関係を分析しなくてはいけない。しかし関係者が情報を持ち寄り、家族関係を細かく分析することは個人情報保護条例にふれる危険性がある。現に虐待の疑いのある子育て混乱事例の検討会を始めた時、「個人情報保護条例」に触れる恐れがあるとと言われて、やむおえず検討会を中止し、混乱がひどくなった事例の経験もある。

昨秋「児童虐待防止等に関する法律」が可決された。[虐待の定義]の中に「外傷を生じさせる恐れのある行為」は身体的虐待に、「子どもの心を傷つけることを繰り返す」は心理的虐待に含まれると解釈されている。ネグレクトを含めれば、関係性障害は虐待としてあつかってもおかしくない。また[児童虐待通告義務]の中で『「虐待が行われている恐れのある場合」の整合性については、通告にあたって、必ずしも虐待と決めつけるだけの確たるものでなくても、かなり蓋然性があるということでもよい。児童福祉法25条による通告は、守秘義務違反や秘密漏示罪には当たらない。』と書かれている。関係者が守秘義務をきちっと守り、家族関係を分析することは個人情報保護条例違反には当たらないと思われ、反対にその家族を救うことになる。

調査票を使用してのリスク親子の発見、治療的親子介入は非常に効果があるが、下記のような間

題点もある。

1) 調査票はリスク親子 発見の手助けとして使用されるべきであり、使用する保育士は乳幼児精神保健の知識を十分に身に付け、自分の見たいを一番大切にし、調査票の結果に操られることなく、上手に利用すべきである。

2) リスク 事例への対応は、その事例に合ったそれぞれ異なった介入をすべきで、集団 での対応

では本格的育児混乱の解決にはならない。

3) 保育士に対する乳幼児精神保健の教育方法を早急に考える必要がある。

4) 早急に乳幼児精神保健の専門家を多数養成する必要がある。

なお保育士、保健婦、乳幼児精神保健専門家が定期的に集まり、事例検討を重ね、乳幼児精神保健の定期的研修会も続けている。

参考文献

- 1) 澤田敬：非行と家族関係、小児心身症研究 第8号（現在投稿中）
- 2) D. W. Winnicott. (成田善弘他訳)：赤ん坊と母親、岩崎学術出版社、1993
- 3) J. Bowlby. (二木武監訳)：母と子のアタッチメント、医師薬出版株式会社、1993
- 4) 澤田敬：乳幼児の心身症、清水凡生編：小児心身医学ガイドブック、北大路書房、103～117 1993
- 5) 深津千賀子他：育児困難を訴える母親の診断と治療、精神分析研究 Vol. 36, No. 5, 516～529 1993
- 6) 岡田隆介：児童虐待から学ぶ家族援助のあり方、周産期医学 Vol. 23, No. 10, 1439～1443 1993
- 7) 渡辺久子：母子関係と世代間伝達、金剛出版、2000
- 8) D. M. Orange et al. (丸田俊彦他訳)：問主観的な治療の進め方、岩崎学術出版社、1999
- 9) C. Cramer. (小此木啓吾他訳)：ママと赤ちゃんの心理療法、朝日新聞社、1994
- 10) 渡辺久子：母性の病理と乳幼児精神保健、乳幼児医学・心理学研究 Vol. 6(1), 1～8 1997
- 11) D. N. Stern. (馬場禮子他訳)：親－乳幼児心理療法、岩崎学術出版社、2000

図 1

子育て環境調査 (妊婦用 1)

年 月 日

該当する項目に○ (複数可)、() 内に該当事項を記入して下さい。

A) 現在

- 1) 何でも相談できる友達: いる いない
- 2) 今回の妊娠について: 嬉しい 嬉しくない
- 3) 今の子ども: () 人 可愛い 可愛くない 時々うるさくなる
- 4) 生まれた後赤ちゃんを楽しみながら育てられると思いますか: 思う 思わない
- 5) 家事・育児などに対する夫の協力: 十分 不十分 全く無し 夫不在
- 6) 夫と上の子どものことを: 良く話し合う 時々話し合う 全く話し合わない
- 7) 夫とお腹の中の赤ちゃんのことを: 良く話し合う 時々話し合う 全く話し合わない
- 8) 今気になること: 無 有 (経済的なこと 子どものこと 夫のこと あなたの父母のこと 夫の父母のこと 病人のこと 隣近所のこと 職場のこと その他 ())

B) あなたや、夫は子ども時代をどのように過ごしたでしょうか

1) あなたが子どもの時

あなたの父親: やさしかった かわかった きびしかった 相手になってくれた
相手になってくれなかった 子ども時代 (離別 死亡 (あなたが 歳の時)

母親: やさしかった かわかった きびしかった 相手になってくれた
相手になってくれなかった 子ども時代 (離別 死亡 (あなたが 歳の時)

あなたの兄弟姉妹: () 内に男女を書きあなたのところに0をつけて下さい

1 ()、2 ()、3 ()、4 ()、5 ()、6 ()

あなたと兄弟姉妹: 一緒によく遊んだ 一緒に遊ばなかった 子守をよくした

父母以外の人に育てられた: 祖父母 (父方 母方) 親戚 (父方 母方) 施設
その他 ()

子ども時代: 楽しかった 辛いことが多かった 友達とよく遊んだ

ままごと遊びをよくした 人形遊びをよくした

赤ちゃんの世話をよくした 忘れた 話したくない

2) 夫が子どもの時

夫の父親: やさしかった かわかった きびしかった 相手になってくれた
相手になってくれなかった 子供時代離別 (夫が 歳の時)

夫の母親: やさしかった かわかった 相手になってくれた
相手になってくれなかった 子供時代離別 (夫が 歳の時)

夫の兄弟姉妹: () 内に男女を書き夫のところに0をつけて下さい

1 ()、2 ()、3 ()、4 ()、5 ()、6 ()

夫と兄弟姉妹: 一緒によく遊んだ 一緒に遊ばなかった 子守をよくした

父母以外の人に育てられた: 祖父母 (父方 母方) 親戚 (父方 母方) 施設
その他 ()

子ども時代: 楽しかった 辛いことが多かった 友達とよく遊んだ

赤ちゃんの世話をよくした 忘れた 話したくない

C) その他: ()

図 2

子育て環境調査(妊婦用 2)

年 月 日

年令 歳 妊娠 ヶ月 夫 歳

該当する項目に○印を、()内には該当事項を記入をして下さい。

- 1) 母子家庭(父親: 死亡 離婚 未婚)
- 2) 再婚家庭: 母・子供()人連れて 子供()人前夫の元へ 子供はいない
父・子供()人連れて 子供()人前妻の元へ 子供はいない
- 3) 妊娠中の生活指導を: よく守る あまり守れない 全く守れない
- 4) 父親の来院: 毎回 時々 無し(仕事の都合 来院を嫌がる)
- 5) エコー時:
 - 1) 胎児の姿を見て: 喜ぶ 喜ばない 見ようとしなない
 - 2) 週数に応じて胎児の成長を: 喜ぶ 喜ばない
 - 3) 父親はエコーを見て: 喜ぶ 喜ばない 見ようとしなない
- 6) 胎動: 母・喜ぶ あまり喜ばない 無関心
父・喜ぶ あまり喜ばない 無関心
- 7) 治療が必要な時: 積極的に治療する 消極的に治療する 治療を拒否する
- 8) 分娩時夫が: 妻の世話をよくする しぶしぶする 全くしない
- 9) 立ち会い分娩: 非常に感動する 感動する 少し感動する 無表情 拒否
- 10) 出生直後の赤ちゃんの抱っこ: 母・喜ぶ あまり喜ばない 拒否
父・喜ぶ あまり喜ばない 拒否
- 11) その他()

図 3

子育て環境調査票(幼児用 1)(0~24ヵ月)

年 月 日

年令 ヶ月 性別: 男 女

子どもの症状で当てはまるものに0を付けて下さい。

- | | |
|----------------|---------------------------------|
| 1) よく泣く | 2) 食欲がない |
| 3) よく嘔吐をする | 4) 抱っこを嫌がる |
| 5) だっこした時身体が固い | 6) お昼寝が出来ない |
| 7) ぐっすり眠れない | 8) 昼寝時よく泣く |
| 9) 他児に意地悪をする | 10) あまり甘えてこない |
| 11) 視線が合わない | 12) 皮下出血、熱傷、その他虐待を疑わせる
外傷() |
| 13) その他() | |

図 4

子育て環境調査票(幼児用2)(2~6歳)

年 月 日

年齢 歳 性別: 男 女

子どもの症状で当てはまるものに○を付けて下さい。

- | | |
|-----------------------------------|--------------------------|
| 1) 友達と遊べない | 2) 先生に異常にくっついてくる |
| 3) おもちゃを乱暴に扱う | 4) 他児にいじわるをする |
| 5) 先生等大人のご機嫌をとる | 6) いたづらがひどい |
| 7) 吐き気を訴える | 8) 頭痛を訴える |
| 9) 腹痛を訴える | 10) 足を痛がる |
| 11) 他の身体痛 | 12) 目をパチパチさす |
| 13) 口をひどく曲げる | 14) 頻尿 |
| 15) 尿失禁 | 16) 便失禁 |
| 17) 言葉が遅れている | 18) 話すとき目が合わない |
| 19) おねしょ | 20) 寝言、寝ぼけがひどい |
| 21) 吃音(どもり) | 22) 給食を食べれない |
| 23) 好き嫌いが激しい | 24) 指しゃぶり |
| 25) 爪噛み | 26) 性的異常行動(|
| 27) 抜毛 | 28) はんかち、人形、など一つのものを持ち回る |
| 29) 抱っこした時身体が固い | 30) 抱っこを嫌がる |
| 31) 奇声をはっする | 32) 多動 |
| 33) 聞こえているのに聞こえないふりをする | |
| 34) 部屋の隅っこを好む | 35) 通園をしぶる |
| 36) 皮下出血、たばこによる熱傷、その他虐待を疑わせる外傷() | |
| 37) その他() | |

図 5

子育て環境調査票(幼児用3)

年 月 日

年令 歳 性別: 男 女

お父さんお母さんについて、下記の該当する項目に○印、()には該当事項を記入して下さい。

- 1)子ども:()人 児は第()子
- 2)祖父母:父方: 同居 別居(近くに 遠くに)
母方: 同居 別居(近くに 遠くに)
- 3)母子家庭:児が(歳 カ月)の時離別 母と同居の子ども(人/ 人中)
- 4)父子家庭:児が(歳 カ月)の時離別 父と同居の子ども(人/ 人中)
- 5)悩みごと: 無し 有り()
- 6)毎日の送り:有り(母 父 祖父母 その他) 無し
迎え:有り(母 父 祖父母 その他) 無し
- 7)子供の受け入れ: 十分(父 母) 不十分(父 母)
- 8)朝食: 毎日食べる 時々食べない 全く食べない
- 9)給食: よく食べる 好き嫌いがひどい さっさと食べない ほとんど食べない 異常に食べる
- 10)子育てを: 楽しんでいる(父 母) 楽しんでいない(父 母)
- 11)しつけ:厳しすぎる(父 母) 普通(父 母) 放任(父 母)
- 12)子供の世話:よくする(父 母) あまりしない(父 母) 全くしない(父 母)
- 13)早期教育(習い事、スポーツ等も含めて):過剰 普通 全くしていない
- 14)その他:(